

論文の和文要旨

論文題目

**Pavese tra letteratura e cinema:
nuove prospettive sul mito americano**

パヴェーゼ、文学と映画

—アメリカ神話に関する新たな解釈—

氏名

小久保真理江

Marie Kokubo

本論文は20世紀イタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼとアメリカ文化との関係について考察する。1930年代ファシズム政権下のイタリアではパヴェーゼを初めとする左翼知識人がアメリカ文化に強い関心と期待を抱き、複数の作家がアメリカ文学の翻訳・紹介にも携わった。広く「アメリカ神話」と呼ばれるこうしたアメリカ文化への傾倒について、これまでの先行研究とは異なる角度から光を当て、新たな解釈を提示することを本論文は目指している。具体的には、これまで注目されてこなかったパヴェーゼの映画への関心に焦点を当てながら、パヴェーゼとアメリカ文化との関係について三章に分けて考察する。第一章では、伝記・批評に関する考察、第二章では歴史文化背景に関する考察、第三章ではパヴェーゼの詩作品に関する考察を展開する。

第一章：パヴェーゼとアメリカ文化 —伝記と批評

第一章では、パヴェーゼのアメリカ神話に関する新たな議論の基盤を築くため、伝記的要素と先行研究の検証を行う。

まず第一節では、パヴェーゼとアメリカ文化との関係を伝記的側面から論じる。パヴ

ヴェーゼは若い頃からアメリカ文化に強い関心を抱き、アメリカ文学の翻訳・批評にも携わった。アメリカへの関心は、文学だけでなく映画・音楽・社会など様々な領域に渡り、なかでも映画には特に強い関心を寄せていた。パヴェーゼはアメリカ文学に傾倒する以前の1920年代からトリノの映画館に頻繁に通っており、アメリカ文化との最初の接点は映画であると言える。本論文ではパヴェーゼの書簡や日記などの資料を参照しながら、そのアメリカ神話形成において映画が重要な役割を果たしたことを示す。

続く第二節では、パヴェーゼのアメリカ神話に関する批評や先行研究の展開を時代背景と関連づけながら整理・分析する。パヴェーゼとアメリカ文学の関係については1940年代から現在まで多くの議論や研究が存在する。なかでも1969年代に発表されたドミニク・フェルナンデスの研究はその後の研究の展開に大きな影響を与えた。1970年代から1980年代までフェルナンデスの議論を複数の方向に発展させる形で同主題に関する研究が進み、1990年代にはアメリカ神話については論じ尽くされたかのようにも思われたが、2000年以降には、これまでの定説を見直す複数の研究が発表されている。第二節ではこうした先行研究の傾向や展開を整理・分析した上で、本論文の観点や分析方法を具体的に明示する。

第二章：文化背景 —1920年代から30年代のイタリアにおけるアメリカ文化

第二章では1920年代から30年代のイタリアにおけるアメリカ文化の受容について考察する。まず第一節では、この時期にアメリカの大衆文化がイタリアの都市部で普及していった背景や過程について論じる。第一次世界大戦後のイタリアでは、映画や音楽、文学の分野を中心に、様々なアメリカの作品が輸入され人気を得た。ファシズム政権とアメリカ文化とは対立的なものとして捉えられがちだが、実際のところ少なくとも1930年代前半までは外国文化に対する規制は比較的緩く、多くのイタリア人が政治的立場に関わらずアメリカの大衆文化に親しんでいたと言える。こうした側面に注目し、第一節では、これまで十分に考慮されてこなかったアメリカ大衆文化の普及とパヴェーゼのアメリカ神話との繋がりについて論じる。

続く三つの節では、アメリカ社会・文学・映画の三つの領域を中心にパヴェーゼの考察を同時代のイタリアの他の作家の考察と比較し、そのアメリカ神話の性質について論じる。まず第二節では、アメリカ社会についての意見を分析し、アメリカ神話の政治的側面に関する定説を批判的に検討する。これまでのアメリカ神話に関する研究の多くは「ファシストの反アメリカニズム」対「反ファシストのアメリカニズム」という対立図式に基づいたものが多いが、実際にはアメリカに対するイタリア知識人の態度は多様

であり、こうした図式に収まらない面がある。体制側知識人の間にもアメリカへの憧れや好意的態度が存在し、また、一方の左翼知識人の側でも、パヴェーゼの場合を含め、アメリカについての態度は両義的であった。

第三節では、「世界文学」や「アメリカンモダニズム」に関する近年の研究を参照しながら、イタリア知識人のアメリカ文学に関する議論を分析する。パヴェーゼやヴィットリーニは、当時のイタリアではまだ十分な評価を得ていなかったアメリカ文学を普遍的な「世界文学」として高く評価し、アメリカ文学から学ぶことによって新しいイタリア文学を生み出そうとした。パヴェーゼのアメリカ文学への関心は、リアリズムへの関心として論じられることが多いが、本論文では、雑多な要素を内包する「アメリカンモダニズム」への関心としての解釈を試みる。

第四節では、アメリカ映画に関する作家たちの言説を検証した上で、パヴェーゼの映画論について考察する。ファシズム政権下のイタリアで青年期を過ごした作家の多くはイタリア映画ではなくアメリカ映画に傾倒した。彼らにとってアメリカ映画は身近な娯楽であると同時に、精神的・知的成長に不可欠な要素でもあった。1926年から1930年の時期に執筆されたパヴェーゼの映画論には当時の無声映画に関する美学的考察が記されている。イタリア映画よりもドイツ映画やアメリカ映画、特にキートンやチャップリンの喜劇映画を好んで見ていたパヴェーゼは、アメリカ映画の商業主義には批判的でありながらもその大衆芸術としての新しい表現力を高く評価していた。本論文では映画の前衛性と大衆性に関する考察に焦点を当てながら、パヴェーゼの映画論を分析する。

第三章：『働き疲れて』－アメリカ文学と映画の影響

第三章では、イタリア・アメリカ両国における映画と文学の密接な関係を考慮しながら、パヴェーゼの詩集『働き疲れて (Lavorare stanca)』におけるアメリカ文学と映画の影響を分析する。まず、第一節ではパヴェーゼの詩作品における「民衆的」登場人物や日常的テーマに焦点を当てる。『働き疲れて』には貧しい農民、工場労働者、放浪者、売春婦などが多く登場し、彼らの日常生活に密着したテーマが中心的に扱われている。こうした側面にはホイットマンとの詩との類似性が確認できるが、両者の間には大きな違いもある。ホイットマンの詩において労働者の活力や個人の自由などが称揚されるのとは対照的に、パヴェーゼの詩では日々の労働による疲弊、個人の孤独、都市における疎外感などが強く表現されている。パヴェーゼは、ドス・パソスやスタインベック、ケイン、アンダーソンなど多くのアメリカンモダニズムの作家と同様に、ホイットマンの民衆や日常に関する詩学を引き継ぎながら、同時代の社会の否定的側面に光を当てたと

言える。また、パヴェーゼの詩作品における民衆の表象には、1920年代から30年代のアメリカ映画との類似性も見いだせる。本論文では、特にチャップリンの映画との類似性に焦点を当てながら、『働き疲れて』における浮浪者や工場労働者の表象について論じる。

第二節では、パヴェーゼの詩作品における視覚に関する表現や、その詩論における「イメージ (immagine)」の概念について、アメリカ文学・映画との類似性を論じる。パヴェーゼの詩には視覚に関する言葉が多く使われているほか、登場人物の視線や仕草、光と影の変化などに重要な役割が与えられている。様々な視点とフレームによって捉えられた断片的なイメージの連なりを喚起させるという点でもパヴェーゼの詩は映画との類似性を持つ。また、『働き疲れて』に収められたパヴェーゼの詩論にも映画との接点は見いだせる。パヴェーゼは自らの詩における「イメージ」について、詩の物語を構成する様々な人や物との間の「想像的な関係」として定義している。本論では、パヴェーゼの「イメージ」の概念と映画モンタージュとの共通性について作家の映画論も照らし合わせながら論じる。またアメリカ文学との関係についても「イメージ」の概念に焦点を当てながら分析し、パヴェーゼがアメリカ文学の「映画的」技法に影響を受けている可能性を示す。